

学習方法によるHIV/AIDSに対する看護学生の知識及び 態度の変化の相違について

宮本千津子* 有藤 由理* 今泉 郷子* 穴戸 栄子*
山本奈々代* 小田嶋佳美** 澤西 美雪** 坂田 直美*

要 旨

A看護専門学校2年次生を2群にわけ、それぞれ異なる順序でHIV/AIDSについての講義およびドキュメンタリービデオの視聴を行い、知識、関心や患者の見方など態度の変化を比較検討した。その結果、HIV/AIDSについての知識の正答者は講義受講後に増加し、ビデオ視聴後に減少した。関心は講義およびビデオ視聴のいずれにおいても高くなった。一方、講義受講後には自分がHIVになる可能性の自覚がより高い方向へ変化し、友人がHIVに罹患しても付き合い方を変えないとする者の減少、および性交渉による感染は自業自得であるとする者の増加がみられた。ビデオ視聴後は同様に付き合う者、感染の原因によって違いはないとする者がそれぞれ増加したが、わからないとする者の増加もみられた。このことより、HIV/AIDSケア教育における多様な教授形式と教材の必要性が示唆された。

キーワード：HIV/AIDS、看護教育、HIV/AIDSケア教育

はじめに

薬害AIDSをはじめ、若年患者の増加や薬物乱用者におけるHIV/AIDSの流行など、HIV/AIDS問題は様々な分野で波紋を投げかけている。このような情勢のなか、われわれ看護婦がHIV/AIDS患者をケアする機会は今後さらに増えると考えられ、これは同時に、看護教育におけるHIV/AIDSケア学習の必要性を示している。我々はこれまで、HIV/AIDS患者へのケアについての教育を充実させる視点から調査を行い、看護学生がHIV/AIDS問題を多面的にまた個別的な事情を想像しながら、さらに合理的な思考を用いて検討しているかどうか、学生のHIV/AIDS患者への支援的態度を養うために重要であることを指摘した¹⁾。また、そのためには学習教材や学習形態を工夫していくことの必要性も示唆された。そこで、本研究では、看護学生に対しHIV/AIDSについて講義およびドキュメンタリービデオの視聴という2種類の授業を実施し、学生のHIV/AIDS患者に対する知識や認識に及ぼす影響を明らかにし、HIV/AIDS教育のあり方について検討を加えた。

I. 研究方法

A看護専門学校2年次生に対し、平成7年11～12月に授業を実施し、その前後で調査を行った。データはすべて看護研究授業演習の一環として収集した。研究目的とデザインの説明をしたあと、実験授業前(T1)分として調査票に自己記入させ回収した。次いで対象を無作為に2群に分け、V群にはビデオ視聴を、L群には講義を行い、続いて第2回(T2)の調査票に記入させた。その後、約2週間をかけて対象自身によるデータ整理と分析の演習を行った後、V群に講義をL群にはビデオ視聴を実施し、最終回(T3)のデータを収集した。以上の調査終了後、データを研究的に活用することについて説明を行い同意を得た者の調査票のみを分析に使用した。

教材として用いたビデオは「エイズ発症—その生と死を語る」というタイトルの既成のもので、内容としては同居している婚約者の男性がAIDSを発症し、その男性を介護しながら最終的には安楽死を選んだカップルについてのドキュメンタリーであり、男性の死後、女性が全国をHIV/AIDSの実態と予防の重要性について語ってまわるというものである。講義内容は、HIV/AIDSの歴史、感染経路、感染実態、予防方法についてであり、現在日本では20代女性の感染が急激に増加しているという点についても

* 川崎市立看護短期大学

** 聖マリアンナ医科大学看護専門学校

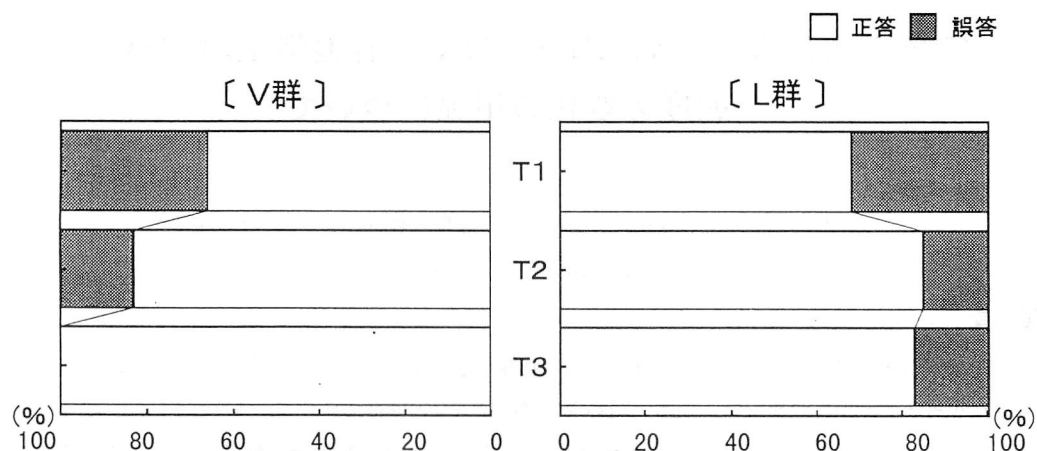


図1 エイズの流行が始まったのはいつごろのことですか

触れた。所要時間はビデオの時間に合わせて約35分のものとした。

調査内容は、HIV/AIDSについての知識・体験、関心や患者の見方・付き合い方などの態度、自分がHIV/AIDSになる可能性の認識、及びHIV/AIDS対策についての考え方であり、いずれも選択肢による回答を用意し、一部回答の理由等について自由記載を促す設問を加えた。

分析は、知識については正しさを、態度についてはその内容や頻度・程度の割合を算出し、教授方法による差を検討した。

Ⅱ. 結 果

1. 対象の概要

対象はL群V群ともに41名の計82名で全員が女性であった。年齢はL群19.9才、V群19.7才で差はみられなかった。

2. 学習方法によるHIV/AIDSに対する知識の変化の違いについて

T1において「エイズの流行が始まったのはいつか」(図1)の問いに対し、「10～15年前から」という正答を選択したのはV群L群ともに約70%の者であった。T2では、いずれの群も約90%と正答者の増加がみられた。しかしT3では、V群で98%が正答とさらに正答率が増加していたのに比べ、L群では正解者が85%と減少していた。

「相手がHIV感染者である場合、HIVに感染する可能性の高いもの」として選択させたもののうち、「感染者からの輸血」(V群100%、L群98%)、および「注射の回し打ち」(V群98%、L群100%)については両群ともに正答者が多かった。「感染者からの母乳栄養」(図2)についてはT1において正答者がV群71%、L群76%と比較的少なかったが、実験授業による変化としてはL群がT2で86%およびT3で90%と正答者が増加し、V群ではT2で71%、T3で83%とT3のみで正答者の増加がみられた。

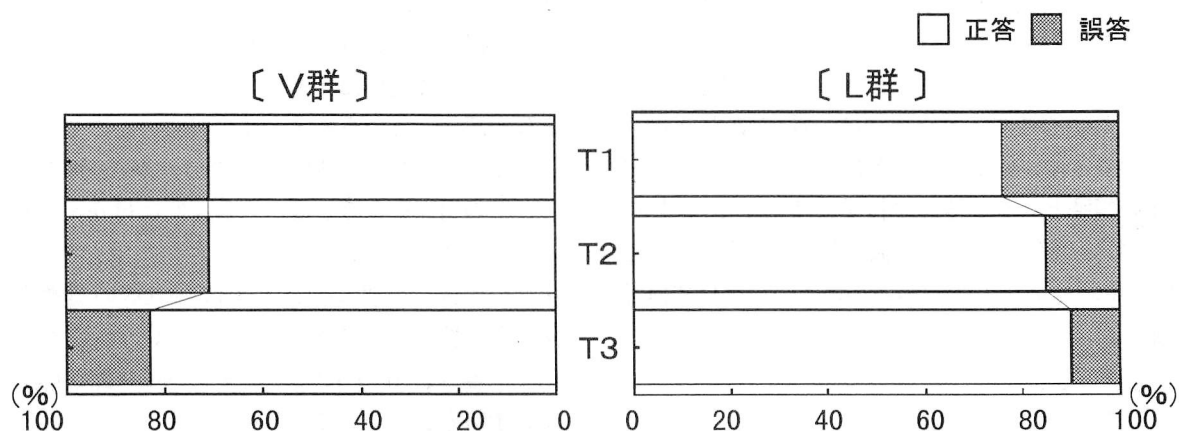


図2 母親がHIV感染者である場合、母乳栄養を受けている児が感染する可能性は高いか

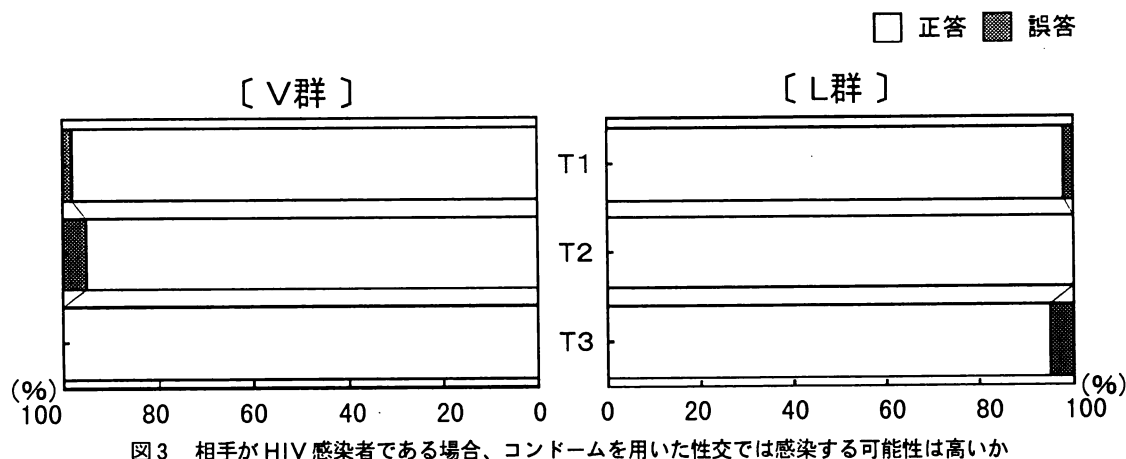


図3 相手がHIV感染者である場合、コンドームを用いた性交では感染する可能性は高いか

“コンドームを用いた性交”（図3）は実験授業前に誤答者がV群0名、L群1名とほぼ全員が正答していたが、V群ではT2においてL群ではT3においてそれぞれ誤答者が2名みられた。

3. 学習方法によるHIV/AIDSに対する態度の変化の違いについて

HIV/AIDSに対する態度のうち「エイズについて関心があるか」（図4）と尋ねた設問について“関心は高い”を選択した者は、V群ではT1で68%、T2で76%と増加がみられ、一方T3では73%とT2に比べ減少していた。L群ではT1で71%、T2で78%、T3で88%と調査を追うにしたがって増加していた。

「友人がHIVに感染したことを知ったらどうするか」（図5（次ページ））については、実験学習前はL群V群ともに“それまでと同様に付き合う”を選択した者が約80%と最も多く、その他に“（感染の）原因による”者および“わからない”者が各々10%（4名）であった。この変化についてみると、“同様

に付き合う”と回答した者はV群ではT2で85%およびT3で95%と増加していたが、L群ではT2で73%とT1に比べ減少がみられ、続くT3では90%と増加していた。“原因による”という回答については、V群ではT2に選択者が0名となったが、T3では3名がこの選択肢を選んでいった。L群ではT2に5名と増加し、T3では再度1名と減少がみられた。

感染の原因による感染者の見方に違いについては「性交渉による感染者と輸血や血液製材による感染者とでは違いがあると思うか」（図6（次ページ））と尋ねた。T1では“性交渉による感染は自業自得である”と回答した者と“（原因によらず）同じである”と回答した者とはV群で37%と37%、L群で各々32%と37%であり、“わからない”はV群24%、L群30%であった。この変化についてみると、V群ではT2で“どちらも同じ”という者が56%と増加し“自業自得と思う”が17%と減少していたが、T3においては前者が54%、後者が27%と逆の変化傾向を示した。L群ではT1、T2、T3の順に“どちら

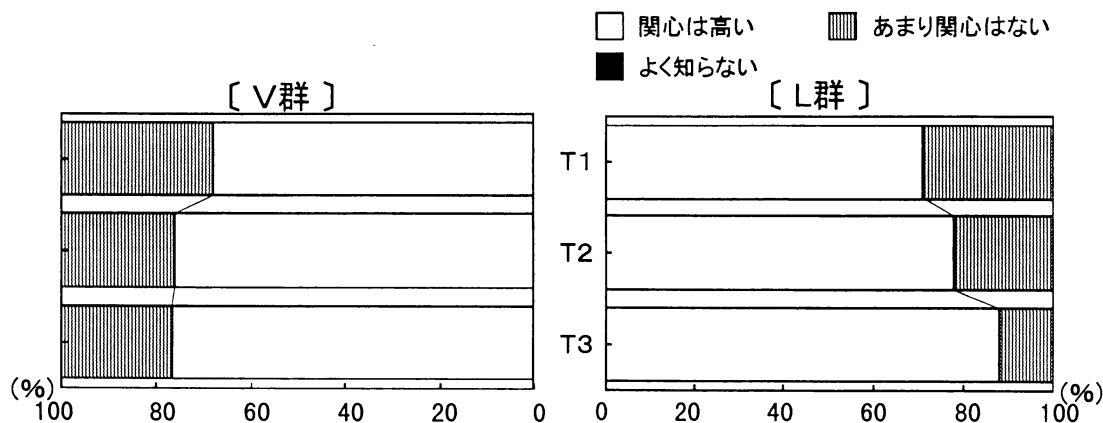


図4 HIV/エイズについて関心がありますか

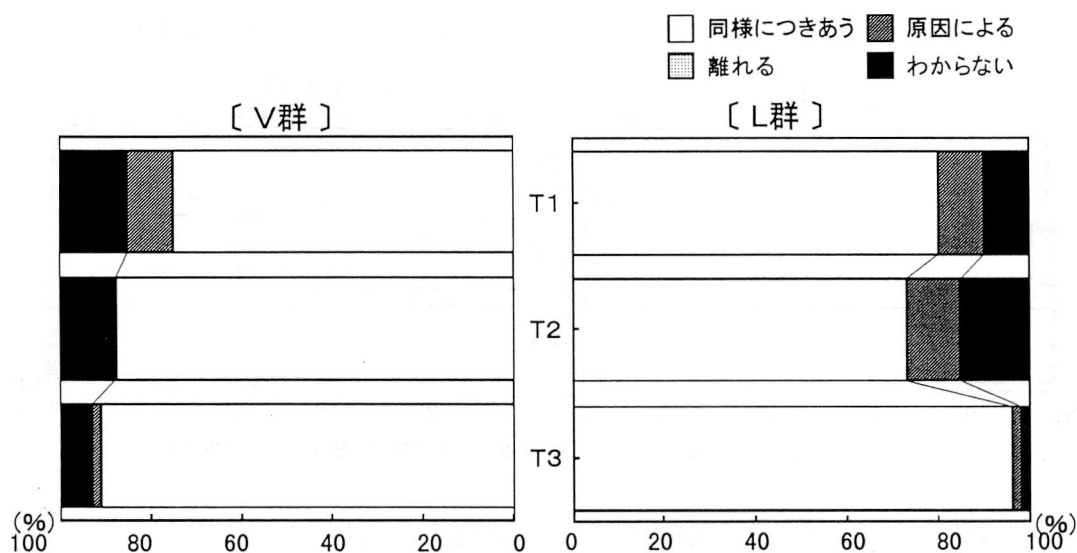


図5 友人がエイズに感染したことを知ったらどうしますか

も同じ”を選択した者が増加し(37%、51%、59%)、
“自業自得と思う”者が減少していた(32%、27%、
15%)。一方、“わからない”を選択した者は、V群
ではT2で24%、T3で19%であり、L群ではT2
で22%、T3で26%であった。

「自分がエイズになる可能性はあると思うか」(図
7(次ページ))と尋ねた設問については、実験学
習前は両群とも“あるかもしれない”を選択した者
が最も多く(V群51%、L群46%)、次いで“多分
ない”(V群24%、L群39%)、わからない”(V群
20%、L群5%)“絶対にない”(V群2%、L群10
%)の順であった。学習による変化としては、“あ
るかもしれない”を選択した者がV群ではT2で54

%、T3で61%、L群ではT2で59%、T3で56%
といずれも講義受講後に増加が大きかった。また、
最も少なく回答されていた“絶対にない”については、
V群L群ともにT2でそれぞれ1名に減少していた。
“わからない”と述べた者は、T2においてV群で
同じ割合(20%)をL群で増加(10%)を示してい
たが、T3においては両群においてT1よりも減少
がみられた(V群12%、L群2%)。

HIV/AIDSに対する社会的対策として「HIV感染
者は保健所や厚生省が名簿を作成して知っておくべ
きだと思うか」(図8(次ページ))という問いを設
定した。これに対しT1では、V群L群とも“(必
要だと)思う”者および“わからない”者がそれぞ

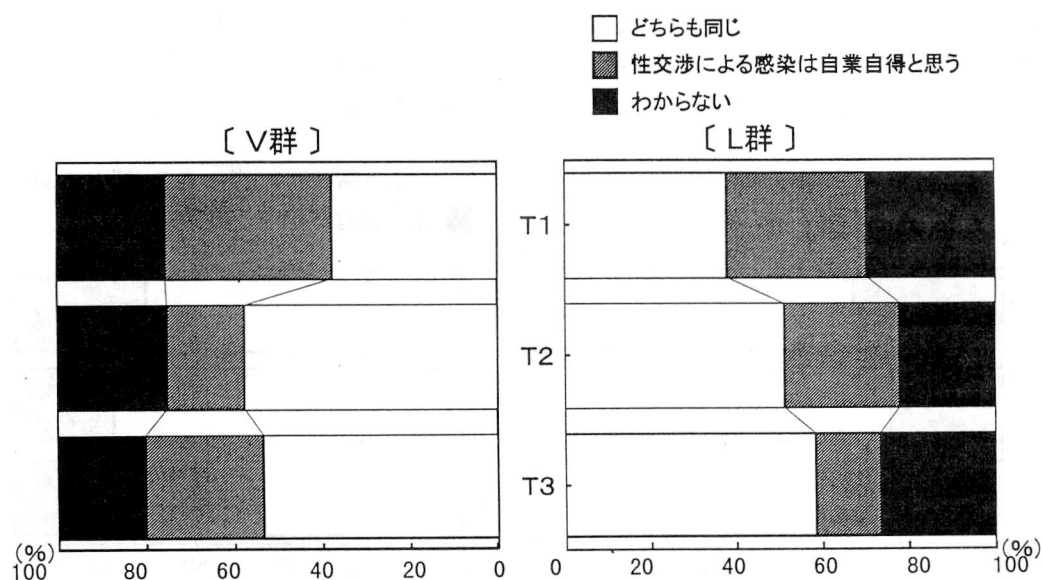


図6 性交渉による感染者と輸血や血液製剤による感染者とでは違いがあると思いますか

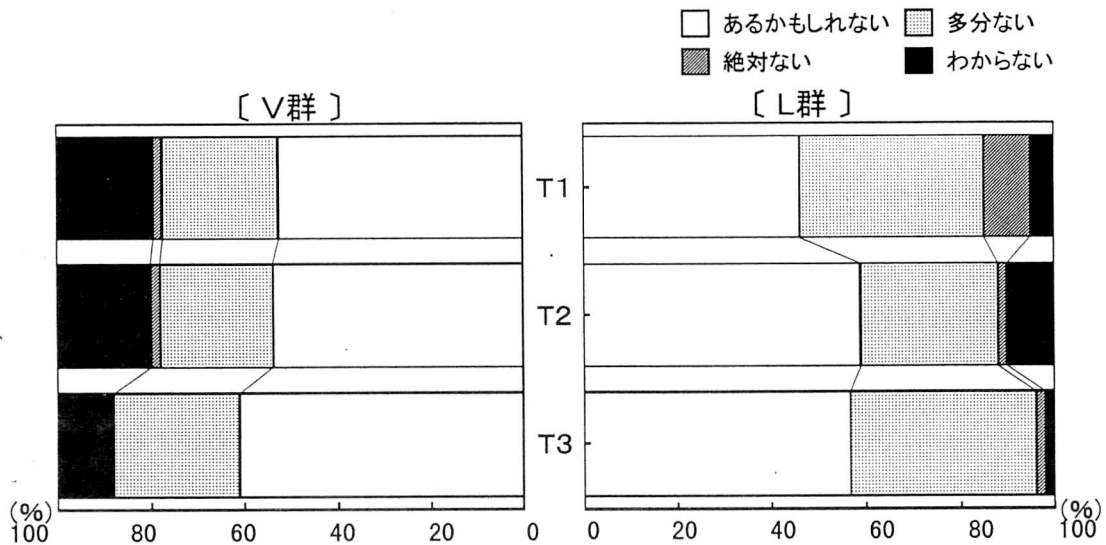


図7 自分がエイズになる可能性はありますか

れが約30%、“(必要だと) 思わない” 者が27%であり、“原因による” を選択した者は10%であった。実験学習後の変化としては、V群L群ともにT2において“(必要だと) 思う” 者の減少(約20%)がみられ、“(必要だと) 思わない” 者はL群では40%に、V群では49%に増加していた。また、T3で“(必要だと) 思わない” 者はL群においてさらに増加し56%を示した。

Ⅲ. 考 察

1. 教授方法の違いによる学習への影響

HIV/AIDSについての疫学的知識を問うた設問に対しては、両群ともに講義終了後において正答者の

増加がみられ、知識の伝達における講義形式の授業の有効性が裏付けられた。また、講義の後に自分がHIV/AIDSになる可能性についてより高く認識した者が増加したことは、講義が知識の獲得に及ぼす効果から考えると、感染経路についての正しい知識の獲得が感染は他人の問題ではなく自分も暴露される可能性のあることの認識をもたらしたためと考えられる。感染の原因による違いの認識においてもまた、V群において講義の後にむしろ態度がビデオ視聴前のものに近づく方向で変化した者がみられた。このことから講義で感染経路や現在の日本における感染の実態について学んだことが、HIV/AIDS感染の危険性を身近なものとして認識させ、これが防衛的

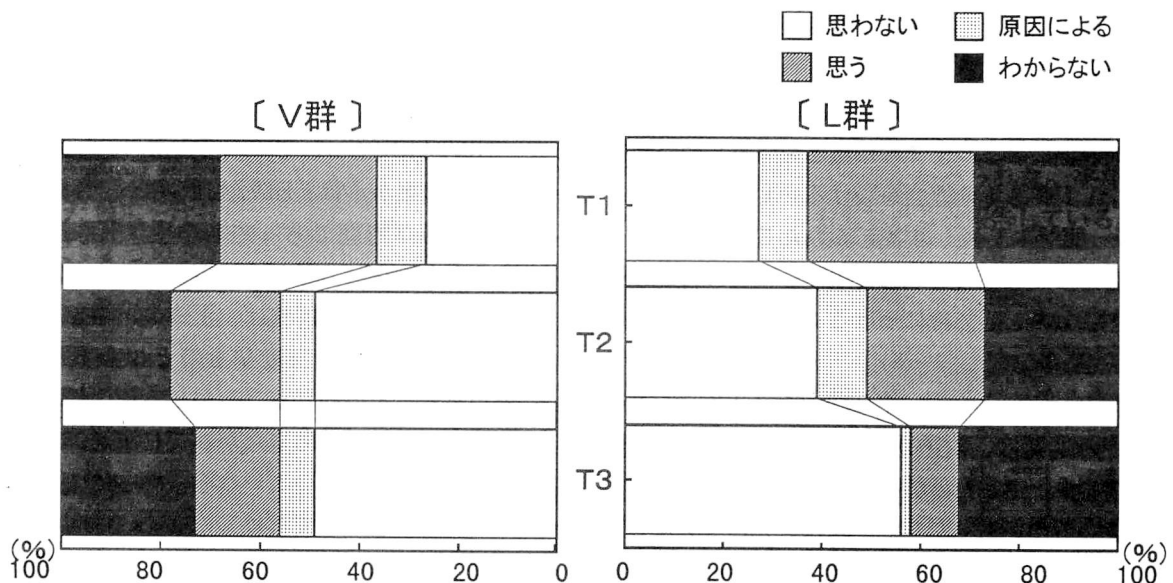


図8 HIV感染者は名簿を作成して保健所や厚生省が知っておくべきだと思いますか

態度へと結びついた結果とも考えられよう。HIV/AIDS問題を身近に考えるために感染経路についての知識を正確なものにする講義は有効であると思われる。

一方、ビデオ視聴後にコンドームを用いた性交によっても感染する危険があると誤答した者が増加したことについては、教材としたビデオの内容が、自覚される感染源のない男性患者についてのものであったことと関連があるように思われる。つまり、身に覚えのない感染ということからコンドームを用いない性交はしていないという仮説が可能となり、このような結果がもたらされたのではないだろうか。ドキュメンタリービデオの視聴はすでにもっている知識を患者をめぐる現実と照らし合わせる機会となる。このように現実と知識とを照らし合わせたとき、講義で得られた知識では現実の説明がつけられず、知識の正しさへの自信がゆらぎ、このような結果が得られたのではないだろうか。実際にはビデオではこのような防御手段をとっていた上での感染であるということは示されておらず、患者である男性が打ち明けなかっただけにすぎない。しかし、誤答した対象は、身に覚えのない感染はありえないという知識を信頼し他に感染経路が明らかにされなかった原因があるのではないかという方向へ思考を発展させていくよりも、自らのもつ知識を訂正するという方向へ反応していた。このような知識の脆弱さは講義における知識提供の限界を示していると考えられる。一方、知識の活用について考えると、いかに正しい知識を獲得したとしてもそれが現実の状況を理解するのに適切に活用されるとは限らない。知識を活用されうるものとするためには、ドキュメンタリービデオのような現実を写したものを視聴した後に、ビデオ上の現実とこれまでの知識とを照らし合わせるカンファレンス等の機会を設ける必要があるかもしれない。これにより、現実にくれたことにより生じた知識へのゆらぎを、知識を点検し現実に対処できるものとして身につけることができるであろう。

学習の形態によらず、第2回調査(T2)における関心の上昇は、対象がHIV/AIDSについて系統的に情報を提供される機会があまりなかったことを示しているのかもしれない。また、先にビデオを視聴した群においてその変化が著明で、一方、講義の後でビデオを視聴した群においては講義受講後とビ

デオ視聴後の両方の段階に関心の上昇がみられたことは、ビデオという教材が多様な感覚を同時に刺激する性質をもつことにより態度変容をもたらしやすい²⁾ことと同時に、教材として用いたビデオが現実の患者とその介護者を追跡したドキュメンタリーであったこともかかわっていると思われる。このようなドキュメンタリーは、単なる情報の提供以上に、見るものに与える感動は大きく、関心をもつきっかけとなるといえよう。このように学習において学習者の感情を巻き込んでいくことは教材について関心をもつ上にも、また関心を継続する上でも重要であることが示されている³⁾。その他の態度についても、L群V群の両者においてビデオ視聴後に、学習前との変化が大きかったことは視聴教材のもつ、心を動かす教材としての特徴があらわれていると考えられる。

一方、感染の原因による違いの認識や社会対策については、ビデオ視聴後にわからないという回答が増加する傾向がみられた。これはHIV/AIDSをめぐる問題が単純なものではなく、個々人の事情が複雑にからみあっていることが認識されたことを反映しているように思われる。ドキュメンタリービデオの視聴はHIV/AIDS患者をマスとしてではなく、個別な事情をもつ個人として認識させる効果があるといえよう。

以上のことから、講義は知識を提供しビデオ視聴から得た感動を客観的に点検する役割を、そしてビデオ視聴は講義で得た知識を絶対的な基準として単純に起用するのではなく患者をめぐる現実と照らし合わせて活用できる形に理解させる役割を果たしていると思われる。

2. HIV/AIDSについての教授方法のあり方

本調査結果からは、HIV/AIDSについて学ぶことはどのような形態であっても学生にHIV/AIDSへの関心をもたらす、考える機会を提供するといえよう。このなかでも、講義は、正確な知識をもち、またHIV/AIDS問題を身近なものとして認識することに効果があったと思われる。しかし、身近な問題として認識を得る効果はあったが、これが是が非でも予防しなければならぬという危機感へはつながらなかった。看護者としてだけでなく、性的に活発な世代として真に身近な問題ととらえるためには、別な教材の提供が考慮される必要があると思われる。

例えば、今回用いたような海外の作品だけではなく、わが国の若い世代の現実を示すドキュメンタリーなどが効果的かもしれない。

また、ドキュメンタリービデオの視聴は、患者個々の事情の存在と、単なる知識としての HIV/AIDS を現実には照らして点検させる機会となったといえよう。このことから、いくつかの授業形態を組み合わせさせて学生の関心を高めながら広くまた深く考える機会を提供することの重要性が示唆されたと考えられる。調査終了時に自由記載によって得られた感想文からは、HIV/AIDS 問題についての自分の知識や態度の曖昧さの自覚と、深く考える必要性、および動機を認識したものが多かった。

一方、教育による長期的効果については、本研究では長期にわたる追跡調査を実施していないためにその効果は不明である。しかし、V 群において、知識、態度ともにビデオ視聴後の第 2 回調査時点 (T2) にはみられた変化が、講義受講後の第 3 回調査 (T3)

においては実験学習前の状態に戻る傾向がみられたことは、強い動機をもたらすと考えられるビデオ学習においても、その効果は長期的ではないことを示唆していると思われ、これまでの調査^{4),5)}と同様の結果が示されたといえよう。考える機会を提供した後に、その効果が発展的に学生の HIV/AIDS ケアについての考え方、さらには看護観に影響していくためには、自らの認識を詳細に点検し、豊かな価値観を展開できるような、継続的な機会が提供されていく必要があると思われる。

おわりに

HIV/AIDS ケアの学びは看護者の看護観にまで影響を及ぼすといわれている⁶⁾。自らの中にある偏見や差別感を点検し、より豊かな看護観を養っていくためにも、多様な授業体系と教材とを取り入れた教育の工夫が不可欠と思われる。

引用文献

- 1) 宮本千津子, 澤西美雪, 坂田直美ほか. HIV/AIDS に対する看護学生の知識及び態度の特徴について——一般学生との比較を通して. 川崎市立看護短期大学紀要, 1: 81-86, 1996.
- 2) Bille 著, 小島操子監訳. 患者教育のための実践的アプローチ. 第 11 章患者教育のメディア. 201, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 1986.
- 3) R. J. Wlodkowski. Enhancing Adult Motivation to Learn. Integrating Emotions with Learning. 178-179, Jossey-Bass Publishers, 1991.
- 4) 武田敏. 知識だけに終わらないエイズ教育. 教育と医学 41 (7): 668-673, 1993.
- 5) 吉岡一実ほか. エイズ教育の効果に関する研究—視聴覚教材を用いて. 三重大学医療技術短期大学部紀要 2: 55-62, 1993.
- 6) 井上悦子. エイズ患者の看護—米国におけるエイズ患者看護の経験から. 教育と医学 41 (7): 653-659, 1993.